

理学部は今

No.56 July 2026



オープンキャンパス模擬授業（応用数学編）の様子



課題研究発表会最優秀賞授与（自然環境科学プログラム）



2年生が取り組む地質調査法実習
〈石油の里にて〉



「じっくり話す」をテーマに開催された
新入生歓迎会（生物学プログラム）



キルギス共和国での温暖化最前線調査
〈氷河湖災害〉

CONTENTS

■学部長メッセージ	2	■研究紹介	8
■令和8年度入学者数	2	■プログラムニュース	10
■理学部後援会の事業報告と事業計画	3	■退任教員紹介	12
■進路内定状況と就職活動支援について	3	■新任教員挨拶	15
■令和7年度卒業生進路状況	4	■科学人材育成事業について	16
■卒業生からのメッセージ	4	■教員の受賞・表彰	16
■在学生の声	7	■これからの行事予定	16

理学部のホームページ <https://www.sc.niigata-u.ac.jp>
発行／新潟大学理学部広報委員会・理学部後援会

理学部は今

No.56 July 2026

1

研究力を核とした新たな地平へ

理学部長 高澤 栄一



新潟では初夏にかけて過ごしやすい季節が続く一方で、梅雨の気配も感じられる頃となりました。本学が採用する4ターム制においては、第1タームの終わりを迎える時期でもあります。新入生にとっては、新たな環境に適応しつつ、基礎的な学びと人間関係を築く重要な段階にあり、その経験の蓄積が今後の成長の礎となります。

令和8年2月には染矢新学長のもと新執行部が発足し、本学は研究力の回復と強化に向けた方針を示しました。地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）のもとで、本学の強みを生かした研究の高度化、国際展開、社会実装の加速が図られています。また、「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業（FLAGs）」への採択により、国際性と実践力を備えた博士人材の育成体制の充実も進められています。これらは、理学部の教育・研究の質向上を支える重要な基盤となります。

教育・研究環境の整備としては、理学部A1棟の改修工事が実施されることになりました。本学のイノベーション・コモンズ化の一環として、A1棟をDXグローバル共創拠点へ改修し、国際交流・連携の強化を図ります。1階にはサイエンスミュージアムを移設・拡充する予定です。本事業の一部は「理学部次世代サイエンス人材育成拠点整備応援基金」を活用して実施するものです。関

係の皆さまのご理解とご協力に深く感謝申し上げますとともに、地域に開かれた教育研究拠点としての機能強化を進めてまいります。

国際的な活動も着実に展開しています。令和8年9月にはタイ王国ナレースワン大学において第5回国際会議（ICNS2026）が開催され、本学からも学生・教員が参加予定です。また、理学部を中心に展開している大学の世界展開力強化事業は最終年度を迎え、7月にはインドおよびオーストラリアから短期留学生を受け入れます。今後も成果とネットワークを生かし、取り組みを発展させてまいります。

さらに、理学部の教育理念を基盤として次世代科学人材の育成にも力を入れています。中学生対象の「N-Step新潟」と高校生対象の「STELLAプログラム」を令和6年度より実施し、今年度で3年目を迎えます。中間評価を控える中、事業の定着と質の向上が求められています。現在は受講生募集の時期であり、科学への意欲と将来への希望に満ちた応募に接し、次代を担う人材への期待を新たにしています。

理学部は今後も、基礎科学の探究を基盤とし、社会の変化に対応した教育・研究を推進しながら、地域と世界に貢献できる人材の育成に努めてまいります。引き続き皆さまのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年度入学者数

令和8年度入学者数		理 学 科							計
新入学		216							216
		数学 プログラム	物理学 プログラム	化学 プログラム	生物学 プログラム	地質科学 プログラム	自然環境科学 プログラム	フィールド科学 人材育成 プログラム	計
令和8年度入学者数	3年次編入学	2	3	1	1	1	1	1	10

注）令和8年4月1日現在の状況です。

理学部後援会の事業報告と事業計画

令和7年度 理学部後援会事業報告

- 1 定期総会の開催
書面審議（令和7年7月）による開催
- 2 各種事業
 - (1) 学生の課外活動の援助
 - ① 大学祭に対する援助
 - ② 理学部A1棟改修事業における学習環境整備への援助
 - (2) 学部教育事業の援助
 - ① 学生研修、実験・実習への援助
 - ② 国際交流関係事業への援助
 - ③ インターンシップ等への援助
 - (3) 卒業祝賀会の援助
 - ① 卒業祝賀会（学位記交付式）の開催
令和8年3月23日（月） ANAクラウンプラザホテル新潟
 - (4) その他
「理学部は今第55号」令和7年7月発行
- 3 理事会の開催
書面審議（令和7年6月）による開催
Zoomによるオンライン会議（令和7年12月）

令和8年度 理学部後援会事業計画

- 1 定期総会の開催
書面審議による開催を予定
- 2 各種事業
 - (1) 学生の課外活動及び福利厚生への援助
 - ① 大学祭に対する援助
 - ② 理学部A1棟改修事業における学習環境整備への援助
 - (2) 学部教育事業の援助
 - ① 学生研修、実験・実習への援助
 - ② 国際交流関係事業への援助
 - ③ インターンシップ等への援助
 - (3) 卒業祝賀会の援助
令和9年3月23日（火） ANAクラウンプラザホテル新潟
 - (4) その他
「理学部は今 第56号」令和8年7月発行予定
- 3 理事会の開催
書面審議による開催、及び、Zoomによるオンライン会議を予定

進路内定状況と就職活動支援について

昨年度の卒業生進路状況は次ページの表「令和7年度卒業生の進路状況」の通りで、55%が大学院に進学し、約4割が会社員や公務員・教員として就職しました。プログラムごとの内訳など詳細は、理学部HP内「就職・進路支援」項目中「卒業生の進路」のページにも掲載しています（<https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/guid/gen.html>）。就職率は、下表「理学部就職率」のとおり、おかげさまで昨年度も100%でした。

理学部では、学生が社会人としての目標を立て、必要な能力を身に付けるための教育（キャリア教育）にも力を入れています。昨年度までは対面式のイベントを幾つも開催してきましたが、情報提供を主たる目的とした会については、昨今の学生さんの行動様式とニーズに合わせて、ネット活用によるオンデマンド形式に変更しました。詳細は、理学部HP内「就職・進路支援」項目中「就活・進学情報」のページ https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/edu/career_education.html）をご参照ください。

一方、直接の情報交換が効果的なイベントについては、対面式で開催しています。全体開催のイベントは、年々参加者数が減り続けているため、今年度は各プログラムにおいて学生のニーズに合わせた面談イベントを開催する予定です。また長年にわたって開催してきた対面式イベントとして、『理学部コロキウム』があります。年8回の開催のうち、6回は理学部教員が自身の研究についての講演を、夏と冬の2回は企業等で活躍している理学部出身者の講演を行っています。今年度からは、学生さんへのキャリア教育としての位置付けを強化するため、研究

者になるモチベーションについてもお話しいただくことにしました。また、理学部就職・進路指導委員会の共催とすることで、学生さんの参加を促進する体制を整えました。開催内容の詳細は、理学部HP内「研究活動」項目中「理学部コロキウム」のページ（<https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/res/next-colloq.html>）をご参照ください。

キャリア教育に関する理学部開設の実習授業として、就業体験ができる『インターンシップ特別実習』があり、今年度は19の企業・事業所のご協力のもと開講します。また講義授業としては、企業などの研究者・技術者による実践的講義である『科学・技術と社会』および『新素材の物性』などがあります。

学部開設授業科目以外の各種イベントは、理学系の大学院生も対象としています。なお大学院生へのキャリア形成支援は、新潟大学PhDリクルート室のHPもご参照下さい。（<https://www.phd.niigata-u.ac.jp/about/>）。大学院生には、特に研究者としてキャリアを積むための様々な技能の習得についても支援が行われています。このように次世代の研究者養成も理学部の大切なミッションです。

以上のように、基礎科学を理学教育の基盤としながらも、社会実践的な教育研究にも注力することで、学生が将来社会で果たす役割について深く考える機会を設けています。キャリア教育を通じて、学部卒で就職する場合、修士号や博士号を取得して就職する場合のそれぞれについてキャリアパスを構築できるように、引き続き様々な支援を続けてまいります。

（理学部就職・進路指導委員会委員長 長束 俊治）

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
就職率	98.8%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
就職内定者／ 就職希望者	84名/85名	93名/93名	85名/85名	78名/78名	67名/67名	72名/72名

理学部就職率

令和7年度卒業生進路状況

学部	数学プログラム	物理学プログラム	化学プログラム	生物学プログラム	地質科学プログラム	自然環境科学プログラム	フィールド科学人材育成プログラム	理学部
進学	20	22	21	10	8	12	6	99
教員（含む非常勤）	2	1	3	1	1	0	0	8
公務員	2	1	4	0	2	3	3	15
民間企業	食品・飼料	0	0	0	0	0	0	0
	繊維・化学・石油	0	0	0	0	0	0	0
	電力・ガス	0	2	0	1	0	0	3
	製薬・医療	0	0	0	0	0	0	0
	建設・建設材料	0	0	0	1	3	1	5
	金属・機械	0	1	1	2	0	0	4
	電気・精密機械	2	0	1	0	0	1	4
	情報・通信	6	4	2	1	0	0	13
	印刷・出版	0	0	0	0	0	0	0
	商業・サービス	2	1	0	1	0	2	6
	金融・保険	1	0	0	0	0	0	1
	教育学習支援	1	1	1	0	0	0	3
	運輸・その他	2	2	3	1	0	2	10
その他	1	3	1	2	1	2	0	10
合 計	39	38	37	20	15	21	11	181

卒業生からのメッセージ

問いを重ねて学んだ数学

数学プログラム 江泉 和樹

理学部数学プログラムで過ごした4年間は、自分自身と粘り強く向き合い続けた時間でした。1年生の頃は、新型コロナウイルス感染症の影響により対面授業が多くなく、友人を作る機会も限られていました。大学生活への期待を抱く一方で、思うように人と関われない状況に不安や孤独を感じることも多く、慣れない環境の中で手探りの日々を送っていたことを覚えています。

入学当初は、数学の抽象的な概念や証明の考え方に戸惑い、講義内容を十分に理解できないことも少なくありませんでした。しかし、講義や演習に継続して取り組み、分からない点をそのままにせず、時間をかけて考え直すことを意識するようになりました。その結果、一つの問題にじっくり向き合い、論理を積み重ねて理解に至る過程そのものに、数学の面白さや奥深さを感じられるようになりました。

分からない問題に何度も挑戦し、試行錯誤を重ねた末に理解へとたどり着いた経験は、自信や忍耐力を育ててくれました。4年生のゼミでは、先生の丁寧なご指導のもと、仲間と意見を交わしながら学ぶことで、多角的に物事を考える力や、自分の考えを言葉で伝える力を養うことができました。

これまで学生生活を温かく見守り、支えてくれた家族への感謝を胸に、理学部数学プログラムで培った考える力を、今後の人生に生かしていきたいと思っています。



大学生活で得た成長

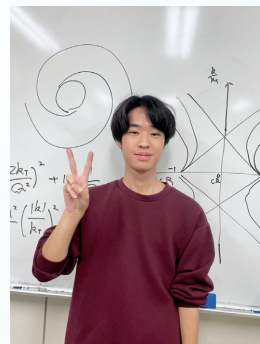
物理学プログラム 八島 柊太

この四年間を振り返ってみると、実に様々な経験をさせてもらったと感じています。入学当初は、これまでとは大きく異なる大学生活の環境に戸惑うことも多く、さらに新型コロナウイルスの影響もまだ残っていたため、理想の大学生活とのギャップを感じることもありました。そのような状況の中でも、自分なりの生活リズムを見つけ、勉強や課外活動に取り組んでいくうちに、気が付けば四年間があつという間に過ぎていました。

こうした四年間の中で、特に自分が成長できたと感じているのは、自主性や自律心が身に付いたことです。大学生活では、何のように学ぶかや、研究を進める中での学習の進め方など、多くのことを自分で考えて行動する必要があります。そうした環境の中で自主的に計画を立てて取り組む姿勢が少しずつ身についたように思います。

また、大学進学を機に一人暮らしを始めたことも、自律心の成長に繋がった経験の一つでした。自由な時間が多い大学生活だからこそ、生活リズムを整え、やるべきことを計画的に取り組むことの大切さを実感しました。こうした日々の積み重ねを通して、自分自身を律する習慣が身についたように思います。

私の場合、この四年間で得られたものは、講義での学びだけでなく、自主性や自律心であったと感じています。大学生活で培ったこれらの力を糧に、これからも成長を続けていきたいと思っています。



大学生活を振り返って

化学プログラム 石山 桜

この4年間を振り返って一番に思うのは、いい意味でも悪い意味でも、大学はこんなにも自由なんだということです。高校までとは違い、授業の選択も課題の管理も生活リズムも、すべて自分次第。最初は何から手をつければいいのかわからず、すべてを自分で管理することの大変さを実感し、バタバタしていたのを覚えています。

そんな中で、物事に優先順位をつけたり、できることから少しずつこなしたりしながら、自分なりのペースをつかめるようになりました。失敗することたくさんありましたが、その経験を通して、自分で考えて動く力が身についたと感じています。

また、大学では一人で頑張るより、周りの人と協力することの大切さをたくさん実感しました。実験や課題を通して、みんなで意見を出し合ったり助け合ったりすることで、「一人じゃ無理！」

なことも乗り越えられた気がします。

来年度からは新潟大学大学院に進学します。さらに自分次第で研究活動や生活が変わってくる環境になると思いますが、この4年間で学んだことを生かし、充実した2年間にしていきたいです。

最後に、この4年間、さまざまな面で支えてくれた家族や友人には感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、みんなの支えに応えられるよう、自分なりのペースで頑張ります！

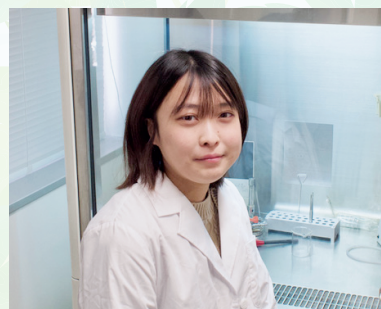


探究し続けること

生物学プログラム 島田 京香

四年間の大学生活は、探求する姿勢を育ててくれた時間でした。講義や実験を通して学びを深める中で、自ら問いを立て、粘り強く考える姿勢が身につきました。一番印象に残っているのは4年次の研究活動です。私は、社会性昆虫であるシロアリの女王がワーカーよりも著しく長命である点に着目し、その寿命差を生み出す生理的・分子生物学的機構の解明に取り組みました。期待した結果がすぐに得られたわけではありません。しかし、実験結果が仮説と一致しなかったからこそ、「なぜそうならないのか」と問い直すことの面白さに気づきました。データを丁寧に読み解き、仮説を組み立て直す過程を通して、研究とは答えを出すことではなく、問いを深める営みであると実感しました。この探究をさらに発展させたいと考え、大学院でより専門的に研究を続けたいと志すようになりました。また、教員免許の取得にも挑戦し、

教職課程と研究活動を両立させてきました。教育実習では、生徒一人ひとりに伝わる授業をつくる難しさややりがいを実感しました。研究活動との両立は容易ではありませんでしたが、その経験が自分自身を大きく成長させてくれました。その成果として教員採用試験にも合格することができました。今後は大学院で研究を深めながら、探究心と伝える力を兼ね備えた教員になることを目標に、さらに努力を重ねていきたいと考えています。



卒業生からのメッセージ

大学生活を振り返って

地質科学プログラム 河野 かれら

憧れの大学生活も、気づけば4年が過ぎ、ついに終わりを迎えるようにしています。1年生のときはまだコロナを警戒していましたが、2年生からは対面授業が解禁され、コロナ禍前のように過ごせるようになった大学生活でした。

幼少期に訪れた化石発掘体験や博物館の展示がきっかけで古生物に興味を持ち、古生物学や地質学分野について学ぶことができました。地質科学プログラムに進学しました。2年生後期から専門的な授業を受け、実際に地層を見る地質調査にも取り組みました。調査で得たデータを室内で解析し、覚えのないながらも過去の地球環境を復元できた時は、地質に詳しくない私でもできるのだなと感動しました。

4年次の課題研究では、約3億年前の遠い昔に生息していた腕足動物の化石を使って、成長様式を明らかにする研究をしました。学んでみたかった古生物の形態進化について研究することができ、古生物学の世界を知ることができました。

こうした調査や研究も、友人達との協力、そして先生方からの知識や支えによって成立したものであり、私一人ではなしえなかったです。特に課題研究では、古生物の基礎から図やグラフの作り方など古生物学以外のことも教わることがあり、大変お世話になりました。また、進学するうえで京都から新潟に快く送り出してくれた両親には感謝しありません。

卒業後は大学院に進学します。まだまだ未熟者ですが、大学院に進学して成長できたと胸を張れるように頑張っていきたいです。



友と学んだ4年間

自然環境科学プログラム 野々山 圭祐

新潟に来て早くも4年が経過し、卒業を迎えようとしています。この4年を振り返ると、勉学に集中して励むことができた、充実した4年間だったと感じています。

新潟大学の理学部では2年生でプログラムを選択しますが、私は生物学の中でも系統や進化に興味があり、自然環境科学プログラムに進みました。このプログラムでは物化生地の全分野に該当する専門科目を学ぶ必要があり、特に高校時代で学ばなかった分野の科目は困難に感じることもありました。その時に助けてくれたのは、同じプログラムに進んだ友人たちでした。

私が生物学を志したように、自然環境科学プログラムには様々な分野の研究を志す友人がいました。成績を競いながらもそれぞれの分野で教え合い、共に勉強して高め合う中で各分野の特色や関連性、面白みを知ることができました。元々は単位を取るため、成績を向上させるために始めた勉強でしたが、共に学び理解

していくことがいつしか大学生活の生きがいへと変わっていききました。4年生で課題研究が始まった後も、会う機会は減ったものの、彼らの近況を聞くたびに自分もまだ頑張れると、忙しい時期でも自分を奮起させることができました。共に学んだ友人たちには今でも感謝しています。

多くの時間を学習や研究に注いだ4年間でしたが、友人と切磋琢磨することで生きがいを見出し、尽力できた点で満足できた4年間でした。この姿勢のまま大学院で研究に尽力し、自身の研究を前に進めていきたいです。



4年間を振り返って

フィールド科学人材育成プログラム 塩田 桃子

大学に入学してから4年、気がつけば卒業まで残り1ヶ月となりました。入学後、生き物を好きな人が自分以外にたくさんいることにまず驚きました。しかも1聞けば10返ってくるような知識量の人ばかりで、自分の知識の浅さや、それまで学校の授業以外の勉強をしてこなかったことを痛感しました。その後、徐々にコロナによる制限が緩和され、様々な人と関わる機会が増えていきました。特に、実習は野外でのデータ採取や資料の作成など協力して取り組むものも多く、同級生達が自分の興味に対して積極的に食らいついていき、わからないことに対して諦めず、とことん突き詰める姿が自分の物事に向き合う姿勢に対して、大きな刺激になったと感じています。4年次の卒業研究は、中々思うようにいかないこともありましたが、取り組み続けると、面白さを感じる瞬間もありました。やり遂げることができたのも、先生や研究室の先輩や同期、友人の支えがあったからこそだと思います。

入学して間もない頃に買った図鑑を今一度眺めてみると、見覚えのあるものが少しずつ増えてきたなと思います。また、動植物の単純な知識だけでなく、自然を守るためにはどのようなことが必要なのか、実際行う上での難しさや制約の中で最適にどう近づけていくかなど、多面的な視点が不可欠であると学びました。私は就職という進路を選択しましたが、これからも大学生活で得たものを糧にしながら、学ぶ姿勢を忘れず進んでいきたいです。



初心を忘れずに

2年 蛭田 黎

入学して早くも1年が経ちました。私は数学プログラムを希望しています。2年生になり抽象的で難しい概念が多く登場するようになりましたが、それゆえじっくり考え理解できたときの喜びは堪りません。大変ですが、そこが数学の面白さでもあると思います。努力を惜しまず、コツコツ学んでいきたいです。また、数学とともに好きなのが部活です。天文部とゴルフ部に所属しており、天文の勉強をしたり星を見たりゴルフの練習に励んだり、充実した日々を送っています。いつもよい刺激をくれる学部の友達や部活の仲間、素敵な先生方に会うことができ幸せに感じています。数学が好きという初心を忘れることなく、何事にも全力

で取り組んでいきます。



一年間の大学生活を振り返って

2年 高橋 拓埜

新潟大学に入学してから、約一年が過ぎました。改めて振り返ってみると、様々なことを経験し成長することができたと思います。

入学する前は、初めての大学生活や一人暮らしに大きな期待を抱いていました。しかし最初の数か月は、家事炊事、履修登録と、慣れない環境で分からないことも多く、大変で不安だった記憶が残っています。

しかし、さらに数か月たち、新たな環境に慣れてくると、生活を楽しむ余裕ができてきました。サークルの仲間と旅行に行ったり、同じ趣味を持つ友人と遊びに行ったり、大変だった炊事が楽

しみに変化したり、想像していた以上の面白いことが沢山ありました。

これからまだまだ続いていく大学生活の中で、より一層成長することができるように、一つ一つの経験を大切に、自分の糧にしていきたいと思っています。



家族への感謝と成長

2年 五十嵐 劉備

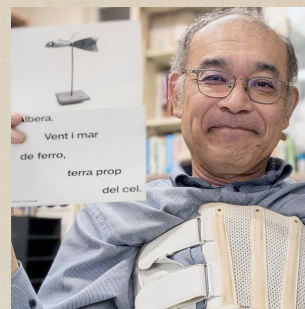
私が新潟大学に入学して一番実感したことは、家族への感謝です。大学に通うために一人暮らしを始めましたが、食事から洗濯、掃除まですべて一人でなければなりません。また、お金の面もアルバイトで稼いだ賃金でやりくりしなくてはなりません。今まで自分が当たり前で過ごしていた環境がどれほど幸せだったのか身に染みて感じました。大学の授業は高校の授業よりもはるかに専門性が増します。私は化学を専門としています、なぜこうなのかといった疑問が晴れていく瞬間はとても興味深いです。現在は様々な分野の化学について学んでおり、自分が今後どの分野に進むか考えている最中ですが、どこに進んだとして

も誰かの役に立てるような研究をしていきたいと思っています。



クモヒトデの年齢推定： 新潟で始めた研究は今

自然環境科学プログラム 宮崎 勝己



生物の年齢は、その生物の発生・成長・生活史・生態などの研究における重要な基礎情報として、様々な動物で、鱗・耳石・骨・殻などの硬組織に形成される縞構造より推定されています。棘皮動物クモヒトデ類は、大型底生生物として海の生態系で重要な位置を占め、有用魚の餌生物として水産学的にも重要な海産無脊椎動物の一員ですが、この類では通常5本ある腕内部の腕骨表面に形成される縞構造が1970年代に成長輪growth ringと名付けられ、多くの研究で成長輪が1年に1本ずつ増える（すなわち成長輪＝年輪）との前提で、年齢の指標とされています。しかしこの前提は、未だ科学的に実証されていません。

私は大学の卒業研究以来、様々な海産無脊椎動物を材料として研究を行ってきましたが、2016年に新潟大学に着任後、新たな研究材料として、県水産海洋研究所の資源調査で混獲される大量のクモヒトデ類に着目し、研究所と標本譲渡の契約を結びました。以来この類について研究室の学生や学外の共同研究者と共に様々な研究を進めており、その一つが年齢推定に関する研究です。前述した成長輪＝年輪の検証については、佐渡臨海実験所近くの磯で採集した浅海性のニホンクモヒトデという種を使い、腕骨表面をカルセインという蛍光色素で標識した後、長期間室内飼育し、標識後に新たに成長した腕骨部位に形成される成長輪を観察するという方法で検証を試みてきましたが、標識結果がなかなか安定せず、

これまでさしたる成果が得られていません。この状況を打破するために、新たに元素分析の手法を導入しました。

硬組織形成時の水温とMg, Sr, U/Caの元素比間の相関関係が、有孔虫殻・サンゴ骨格・魚耳石などで確認されており、この相関関係がクモヒトデ腕骨でも成立していれば、温帯の浅海域に生息するクモヒトデでは、腕骨の成長方向に沿った1年1サイクルの元素比変動が、水温の季節変動に対応して検出されるはずです。この考えのもと、東京大学大気海洋研究所の白井厚太郎博士との共同研究を、今年度より本格的に始めています。今は分析用の試料作成法を学生が習い始めた段階で、まだ何も結果が出ていませんが、今後実際の分析を進め、腕骨における水温・元素比間の相関関係の存在、元素比変動パターンと成長輪構造の対応などを明らかにすることで、成長輪＝年輪の検証が実現出来るでしょう。また詳細は省きますが、しばしば不明瞭化して計測が難しい成長輪の本数を、正確に計測する手法の開発へ発展させるアイデアも温めています。残り3年余りに迫った定年退職までにこれら全てに決着が付けられるのか、競走がこれから激化していくでしょうが、新潟大着任後に大病を患い一年余りを棒に振り、その後いくつかのハンディを抱えることとなった身としては、ここに来て新しいチャレンジが出来ることに大いにワクワクしています。



図1 ニホンクモヒトデ成体。下のスケールは一目盛1mm。5本ある腕の内部に、腕骨が節状に連なる。（撮影：田辺彩水）



図2 腕の最基部にある第一腕骨のSEM（走査電顕）像。上部左右の翼状窩と呼ばれる部分の表面に見える縞構造が、成長輪。

曲面上のグラフ理論

数学プログラム 鈴木 有祐



昨今、AIの進歩は目覚ましく、数学の営みそのものも変わっていくのではないかと考えています。近い将来、「AIによって数学の大きな未解決問題が解かれた」というニュースを耳にすることもあるかもしれません。しかしそのとき、人間はまず「AIがどのようにしてその問題を解いたのか」を理解し、納得する必要があります。（その説明自体をAIにしてもらうことになるのかもしれませんが。）AIが作った数学の証明にも、最終的に誰がお墨付きを与えるのかという問題がありますし、結局のところ、数学も「人の営み」から完全に切り離されることはないと思っています。

数学と計算機の関係で有名なのが四色定理（問題）です。これは、「平面上のどんな地図でも、4色で塗り分けられる」ということを述べた定理です。長年未解決でしたが、1976年、AppelとHakenにより、計算機を用いた証明によって解決されています。当時は「これを数学の証明として認めてよいのか？」という議論も巻き起こったようです。ここで、「多数の具体的な平面地図が4色で塗れることを計算機でチェックすることで証明をした」というような勘違いをしてはいけません。いくらでも領域の数が大きい平面地図を考えることができるので、このような考え方で数学の証明を行うことはできません。実際には、壮大な「数学的帰納法」を用いてその証明が行われており、その縮小操作や既約地図というものを列挙する際に計算機が使用されています。現在では証明は改良されていますが、依然として計算機

を用いたものであることに変わりはありません。

この四色定理は、点と線のみからなる図形を扱う「グラフ理論」という分野に属しています。中でも私は、曲面上に描かれたグラフを扱う「位相幾何学的グラフ理論」を研究しています。例えば、平面上では4色で十分であったのに対して、ドーナツ型の曲面の上では7色必要になる地図が存在することが知られています。

特に、最近は、「局所変形問題」や「多少の交差を許したグラフ」に興味を持って研究を行っています。前者は、曲面上のグラフを少しずつ変形して互いに移り合わせることができるかどうかを考える問題で、「与えられた2つのグラフがどのくらい近いのか？」ということの評価することにも関連します。後者に関しては、辺の交差に関する条件を少し緩めただけで劇的に状況が変化することが分かっています。例えば、平面性の判定問題が多項式時間で解けるのに対し、各辺高々1回の交差を許したグラフの判定はNP-完全問題（計算機科学的に「難しい」問題）であることが知られています。

研究の際には計算機を使って小さな例を調べることがありますが、本当に重要なのは、大量の「絵」を描き、そこから見えてくる数学的構造を言葉にしていく作業です。AIは短時間で文章やイラストを生成できますが、「絵」とにらめっこしながら発想し、新しい概念を作り出していくという営みは、まだしばらく人間の役割として残るのではないかと考えています。

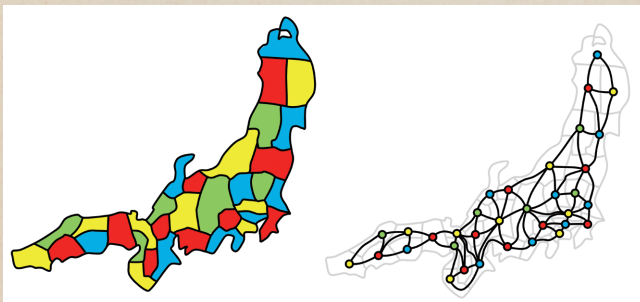


図1 「平面地図の4色塗り分けと対応する平面グラフの頂点彩色」

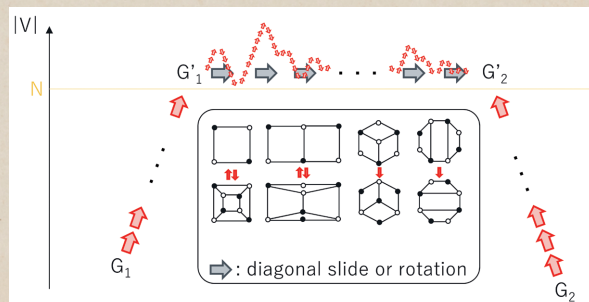


図2 「局所変形問題のイメージ」

プログラムニュース

数学プログラム

昨年10月25日に第2回数学教室ホームカミングデーが開催されました。数学科の卒業生である角井伸一氏（厚生労働省 青森労働局長）と小川正樹氏（新潟県教育庁 教育次長兼政策監）から、貴重なお話を伺うことができました。卒業生も多く参加され、講演会終了後の懇親会も和やかに行われました。12月2日には数学プログラム講演会が行われ、数学科卒業生の西田裕志氏（神戸市立本山南中学校主幹教諭）と牧口昌範氏（新潟県立村上高等学校教諭）が講演されました。

本年4月に原瀬晋先生が新たに准教授として着任しました。原瀬先生のご専門は数理統計学と数値解析です。数学プログラムでは統計分野の専門家が不在となっておりましたが、原瀬先生のご着任により、当該分野の教育・研究環境がさらに充実しました。

一昨年度より、年に数回学生の集いを実施してきました。昨年度は3回実施し、本年度も4月の3・4年生向けガイダンス後に実施し

ました。学生の集いでは、学部生、大学院生、教員が自由に歓談し、親睦を深めるとともにゼミや大学院での生活等に関する情報交換も行いました。また、「大学院への勧め」と題して教員と大学院生による説明会を学生の集いの前に行ったこともありました。これらの行事を通して、学生の縦横のつながりが増え、大学院進学者増につながることが期待しています。実際に少しずつですが良い効果が現れてきているように思います。



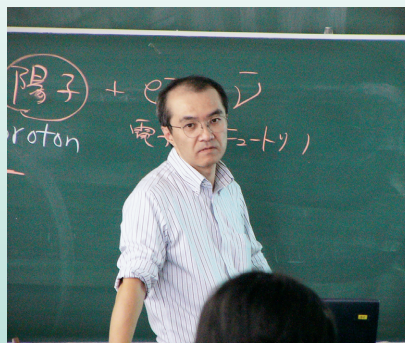
数学教室ホームカミングデーでの角井氏の講演

物理学プログラム

3月末日、原子核理論研究室の小池裕司先生（教授）が定年退職されました。小池先生が新潟大学に着任されたのは1994年で、32年間の長きにわたり、学生（学部生・大学院生）への教育と研究の両面でご活躍されました。写真は今よりも（すこし？）若い頃の小池先生のお姿です。小池先生の最終講義「量子色力学とともに生きた40年間で振り返って」には多くの方が訪れ、とても盛況でした。

新年度になり4月、物性理論研究室に大久保毅（つよし）先生が准教授として着任されました。大久保先生は近年、大学院生や若手研究者を対象とした「計算物理春の学校」の世話人を務められ、2023年には「テンソルネットワーク法入門」という題目で講義をされました。いま注目を浴びている量子コンピュータを用いた計算手法の開発もされています。

6月、第24回物理学プログラム・ケルビン祭が開催され、物理学プログラム4年生の成績優秀者（中山賞3名、同窓会奨励賞3名）の表彰が行われました。賞状と副賞は物理学教室の同窓生の方々のご支援によるものです。また、毎年8月に開催される「新潟大学理学部オープンキャンパス」の研究室紹介イベントのスタッフとして雇用する学部生への謝金は、理学部後援会の方々のご支援によるものです。物理学教室一同、心より感謝申し上げます。



化学プログラム

2025年夏以降の化学プログラムニュースをお伝えします。8月には昨年に引き続きオープンキャンパスを開催しました。プログラム説明、模擬授業、そして学生による研究ポスター紹介が行われ、大変多くの方にお越しいただきました。2026年度も同様のオープンキャンパスを予定しております。

10月には、例年よりやや少ない36名の2年生が化学プログラムに配属されました。

2026年2月から3月初旬にかけて、修士論文、卒業論文の発表会（写真）が行われました。そして、2025年度末をもって、古川和広先生と佐藤敬一先生が定年退職されました。お二人は理学部化学科・化学プログラムでの教育・研究に長らく携わってこられました。長きにわたる多大な貢献に感謝を申し上げるとともに、今後の益々のご健勝をお祈りします。お二人には非常勤講師としてしばら

くの間、化学プログラムの講義をお手伝いいただきます。

4月には新年度が始まりました。今年度から大学院博士前期課程が自然科学研究科から総合学術研究科へと改組されました。ますます複雑化する社会において、化学の専門的見識を深めることは最も重要ですが、文理を横断した幅広い視点から自分の専門を見つめることも大事になってくるでしょう。化学プログラムにおける研究の中核を担う大学院生達の活躍を期待しております。



生物学プログラム

2026年3月23日に令和7年度卒業式が挙行され、生物学プログラムの卒業生および博士前期課程基礎生命科学コースの修了生に学位記が授与されました。式典後には理学部祝賀会も催され、教職員とともに学生の皆さんの門出を祝うことができました。新潟大学で培った学びと経験、そして人とのつながりを礎として、それぞれの就職先や進学先で一層活躍されることを、教職員一同心より願っております。

また、長年にわたり生物学プログラムにおける教育、研究および運営にご尽力いただいた岩崎俊介先生が、2025年度をもって定年を迎えられました。3月19日には、岩崎先生による最終講義「プロトプラストに魅せられて」が理学部B303講義室にて開催されました。岩崎先生のこれまでの多大なるご貢献に心より感謝申し上げます。

ますとともに、今後のご健勝とますますのご活躍をお祈りいたします。

さらに、4月17日には、生物学プログラムの新入生歓迎会が開催されました。今年度は「じっくり話す」をテーマに、各テーブルに分かれて小グループで懇談を行いました。新入生の自己紹介をきっかけに、大学生活、研究、留学などさまざまな話題で会話が広がり、様々な壁を越えた交流が生まれました。学生同士の横のつながりと、先輩・後輩の縦のつながりを大切にしながら、充実した学生生活を送られることを期待しております。



地質科学プログラム

新任教員2名を迎えて新体制となり、2年目に入りました。授業内容やカリキュラムの改良・調整も一通り終え、現在は安定した運営となりつつあります。一方で、地質科学プログラムが使用している理学部A1棟の改修工事が進められる予定となっており、引越し等も含めて慌ただしい1年になる見込みです。

3年生が取り組む「野外実習A（通称：進級論文）」は、本プログラムの集大成科目です。昨年度は、例年実施している長岡市小国町ではなく、新たに出雲崎町での調査地域へと変更し、山形県鶴岡市温海地域と2つの調査地に分かれて実施しました。出雲崎班は堆積岩、温海班は堆積岩と火成岩の両方をテーマとして、地域の地質を総合的に考察する調査に取り組みました。

大学の世界展開力強化事業として、12月にインド、3月にオーストラリアへの派遣を実施しました。インドでは超高压変成岩と呼

ばれる貴重な岩石、オーストラリアでは地球史上最大の絶滅が起こったペルム紀―三畳紀境界の地層など、教科書で学ぶ内容を実際に観察する機会となりました。大人数での海外派遣は今年度をもって一区切りとなる予定です。

現在、研究室に配属された4年生は、課題研究に向けた活動を開始しております。卒業論文作成に向けた野外調査や実験に取り組むと同時に、就職活動や大学院進学への準備など、卒業後の進路についても並行して進める重要な時期となります。学生が多忙な様子をご覧になる機会もあるかと存じますが、何卒ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



地質調査法実習IIIで沢を踏査する3年生

自然環境科学プログラム

2025年度は、自然環境科学プログラムでは21名の卒業生を送り出しました。2月12日には恒例の課題研究発表会が行われ、それぞれが一年間取り組んだ研究成果を披露し、活発な質疑応答が展開されました。3月23日の卒業式を経て、12名が大学院に進学し、残りは会社員や公務員などとして県内外へ巣立っていきました。新潟大学理学部、そして自然環境科学プログラムでさまざまな学んできたことが、それぞれの新天地で活かされていくものと大いに期待しています。

年度末には、臼井聡准教授がめでたく定年退職を迎えられました。先生は1996年に、当時の理学部自然環境科学科に講師として着任され、以来、有機化学分野の研究と、理学部での教育に携わってきました。退職に先立つ1月28日には「有機化学反応機構の研究から学んだこと―若い世代に託して―」の演題で最終講義が行わ

れました。30年にわたる新潟大学在職中の研究・教育活動での経験を中心にさまざまな話題を展開され、参加した多くの教職員・学生、また学外の関係者の皆さんに貴重なメッセージを残していただきました（写真）。先生は、今年度一年間は新潟大学教育支援員として一部の授業に携われますが、それより後については、いろいろと構想をお持ちの様子です。先生のご健康と益々のご健勝・ご活躍を、プログラム一同、これまでの感謝と共に心よりお祈り申し上げます。



最終講義後の臼井先生

フィールド科学人材育成プログラム

2025年度は、当プログラムでは11名（農学部と合わせて24名）が卒業しました。また接続する大学院フィールド科学コースでは、修士課程修了者14名（理学8名、学術3名、農学3名）を送り出しました。

2026年4月より助教の小山愼歩先生が着任されました。小山先生の専門は、海鳥やウミガメなどの野生動物を対象とした行動生態学および生理生態学です。GPSなどの小型記録装置を用いたバイオリギングや生理指標の測定を通して、環境変動が動物の行動や体の状態に与える影響の解明に取り組んでいます。変化する環境に動物がどのように応答しているのか、その仕組みの解明が今後期待されます。

教員のフィールド調査も引き続き活発です。石崎准教授は、地域によって異なる植物の繁殖戦略を調べるため、2025年に愛知県と北海道でハルリンドウの調査を行いました。各集団の開花条件や成

長パターンと各地の気象との関連性について、今後の解析で明らかになることが期待されます。本田教授と高橋助教は、2025年夏に三陸沖での船舶観測に参加しました。海洋の異常高温が大气に及ぼす影響を直接観測するため、高頻度での気象・海洋同時観測により、海面水温の変化に伴う下層大気や海霧の形成過程に関する貴重なデータが得られ、その実態解明を進めています。

2025年夏は3年続けて猛暑に見舞われ、もはや異常とは言えない状況となってきています。我々が対象とする多様なフィールドにも現れてくる変化を注視しそのプロセスを解明していくことが、フィールド科学プログラムメンバーの責務であると考えています。



三陸沖観測は2隻の船で連携して実施

新潟大学での32年間を振り返って

物理学プログラム 教授 小池 裕司



早いもので1994年4月に着任して以来、瞬く間に32年の月日が経ちました。大学院を修了した後、直ちに米国で5年半ほどポスドク生活をしていた私にとって、新たな外国に行くような気分で新潟に着任したのを懐かしく思い出します。着任当時は定年まで居るとは想像していませんでしたが、今振り返ってみると新潟は自分を成長させるのに絶妙な場所だったと改めて感じています。

私の専門は強い相互作用の基礎理論である量子色力学（QCD）を基礎にしたハドロン物理学の理論研究ですが、着任当時、新潟大学の原子核理論研究室は、核子多体系としての原子核研究において国内有数の実績を誇る研究室でした。他方、ハドロン物理研究も世界の原子核理論分野で新たな潮流になっていたため、新潟でもQCDやハドロン物理研究を立ち上げるべく採用いただいたようです。他に同分野の教員がいない環境でしたので、院生指導を一人で行う責任はありましたが、一人で好きにやれる気軽さもし感じました。院生をゼロから指導しながら共同研究をするというのは初めてでしたので、適切な指導ができていない部分もあったかと思い反省しています。そんな未熟な教員でしたが、私が接した院生たちは非常に熱心に忍耐強く研究に取り組み、たくましく育ち、社会の多方面で活躍している様子を見ることができ、新潟で教員をしていて良かったと感じています。教育をしながら逆に自分自身が成長させてもらったと思っています。

私は院生時代からQCDに魅了され、できる限りQCDを忠実に用いたハドロン物理のテーマに取り組みたいと考えていました。そうした折に、米国での

ポスドク時代からスピン偏極した核子と電子、あるいは核子どうしの高エネルギー衝突実験による核子構造の研究が世界的に盛んになり初めたため、高エネルギーQCDの研究を開始しました。部分的にはQCDを解析的に厳密に扱えるアプローチに醍醐味を感じました。新潟ではほぼ一貫してこの分野の研究を推進し、世界の研究者たちに知られる多くの重要な成果を、院生たちとの共同研究により上げることができました。日本国内にはこの分野の研究者は少ないため、ハドロン理論分野において、新潟大学の特色や存在感を示せたと思っています。私との共同研究で、9名の院生が博士学位を取得してくれました。

また、2003年11月から10か月間、RHIC加速器により核子核子スピン偏極衝突実験が行われていた米国ブルックヘブン国立研究所に文科省在外研究員として滞在できたことは、国際共同研究の拡張や、指導院生をポスドクとして海外派遣することにもつながり、非常に有意義だったと感じています。

新潟大学で充実した32年間で過ごせたのは、同僚の教員の方々や院生たちのおかげです。深く感謝いたしますとともに、理学部の今後の益々の発展を祈念しております。

新潟大学での30年を振り返って

生物学プログラム 准教授 岩崎 俊介

私が新潟大学理学部生物学科に助手として採用されたのは1996年6月1日ですから、在職期間は正確には30年ではなく29年10ヶ月になります。赴任するまでの4年2ヶ月間はポスドクとして筑波研究学園都市の研究所にいました。研究所にも少数ながら学生はいたのですが、毎年年齢が上がっていく“大人”が主な構成員である環境から、“若者”が主な構成員である環境に移ったことは新鮮でした。自分自身も研究所に行く前は学生・院生・研究生として大学に在籍していたのですが、大学に戻って最初に「先生」と呼ばれて“こそばゆく”感じたことを覚えています。

私が採用されるまでは、理学部生物学科に植物分野で分子生物学の手法を用いる教員がおらず、私にはその役割が期待されたようです。そのために必要な設備・機器・消耗品など、生物学科の教員・前任の研究所のボスなどから大いに助けていただきました。ほどなく加藤朗先生が赴任されて、研究テーマは別でありながら、お互いに協力しあって研究室を運営してきました。以上の皆様のサポートなしには研究を継続できませんでした。この場を借りて心から感謝をお伝えいたします。

次に私の研究生生活を振り返ってみます。私自身の興味の原点は、植物細胞の全能性を支える生きた植物細胞一つ一つの中身（原形質）で起こっている現象を明らかにすることです。

そのきっかけは学部時代の恩師である建部到先生・長田敏行先生のプロトプラスト研究に触れたことです。同じく学部時代に習った花粉母細胞プロトプラストを用いた減数分裂の研究で有名な伊藤道夫先生も新潟大学理学部生物学科の2期生ですし、建部先

生の共同研究者だった青木茂治先生も当学科卒業生だったことに因縁を感じます。私自身大学院は建部先

生の授業で、ジベレリンによる植物細胞の伸長方向の制御に関わる植物細胞表層微小管の研究に挑戦されていることが紹介された柴岡弘郎先生の研究室に進みました。その後様々な研究を行いました。結局新潟大学での最後の数年間は、学部時代に材料としたタバコBY-2細胞を用いて、プロトプラストを用いた植物核膜孔を介したタンパク質輸送実験系確立を目指して一定の成果を得ることができました。しかし、残念ながら時間切れで、最終目標までには至らず、今年2月10日が最後の実験になってしまいました。本音を申し上げますと、もっと実験したかったです。

最後に私から残られる皆様方にお伝えしたいことを思いつくままに記して終わりにします。学生さんたちの指導を通じて、研究者養成を行いながら、研究を進めるのが大学教員の役割です。でも、やはり教員自身が実際に実験を行うことが大切です。自分自身で体験・観察しなければ問題点の発見や改善に繋がらないことを実感しました。実験方法については原典に当たること、また数十年昔の論文を読むことは大いに役立つことも実感しました。



新潟大学での30年間の学び

自然環境科学プログラム 准教授 臼井 聡

1996年4月に新潟大学理学部自然環境科学科に着任して以来、大した研究成果も上げぬままに30年も馬齢を重ねてしまいました。物・化・生・地4分野の教員で構成されていた自然環境科学科では、研究分野も生き立ちも異なる先生方と真摯に交流することができました。山岸先生、石田先生、檀上先生、増田先生、濱口先生をはじめ、味わい深い先生が多かったので、いろいろなものの考えかたに触れることができ、この30年間で人として成長できたと思います。

学科や学部コロキウムで他の分野の研究哲学に触れたことも楽しい思い出です。研究者として「目から鱗」のようなワクワクする経験もさせていただきましたし、個人的に楽しいお付き合いをすることが出来ました。このような幸せな大学生活が送れたのも新潟大学が多様な教員により構成されていたことが大きいと思います。

学術的には、岡村先生、赤阪先生など他学科の化学分野の先生と共同で研究室運営や共同研究をすることで、研究の励みとすることができました。さらに、その伝を辿った筑波大、富山大、信州大との研究会や野球大会（写真参照）などを通して学生の研究指導も充実させることができました。また、広島大、三重大、大分大、高知大、兵庫県立大をはじめとした有機反応機構研究室合同で若手の会を企画し、継続開催にこぎつけたことも大きな成果でした。この様に微力ながら後進の育成にも貢献できたことで、これまで大学研究者として育てていただいた多くの先達への恩返しができたのではないかと胸を撫でおろしています。

自然環境科学科所属ということもあり、新潟県環境企画課、環境対策課関係の仕事を引き受けることもあ

りました。環境アセスメント審査会や酸性雨研究連絡協議会の運営では地域社会の仕組みや現在の社会問題の動向を知ることができ、大学教員がいかに世間と隔絶した世界で仕事をしているのかを身にしみて感ずるところとなりました。この様な機会が得られたのも新潟大学が地域社会からいかに期待されているかの証であると思います。

新潟大学着任時は自然環境科学科が設立されて二年目、これから学生を育て、卒業生を排出していく時でした。教育カリキュラム面では試行錯誤の繰り返しでしたし、学生に自然環境科学科としてのアイデンティティを持ってもらうことも考えなければなりませんでした。当時、一番の若輩者であった私は学生をけしかけてソフトボール大会などを開いたことも良い思い出です。

私がこの歳になっても若いつもりでいられるのも、このように多くの学生、教員と接することで、常に刺激を得られたからだと感謝しております。



数学プログラム 准教授 原瀬 晋

2026年4月1日付で理学部数学プログラムの准教授に着任いたしました原瀬晋（はらせしん）と申します。14歳まで東京で過ごした後、鳥取・神奈川・広島・滋賀の各地方に複数回移り住み、このたび、縁あって新潟大学に職を得ました。

前職では、私立大学理系学部にて、数学を専門としない低学年の基礎数学教育を担当してきました。新潟大学では、職務内容が大きく変わり、専門科目の講義を中心とした全く新しい科目を教えることになり、これまでの研究経験をもとに授業準備に励んでいます。今後も、学生の研究指導などが加わり、手探りの状態が続くものと思われますが、一方で、学生とともに学んでいけることを大変楽しみにしております。

研究分野は、数理統計学と数値解析の境界領域です。特に、モンテカルロ法と呼ばれる確率的シミュレーション技法とその統計計算への応用を研究しています。統計分野では、1990年代を境

目に、計算機上での反復計算に基づく数値計算手法が多用されるようになりました。この際、さいころをふるといった、あたかもでたらめに見える数列、いわゆる乱数列が必要となります。私は、最初、乱数生成法の研究からスタートし、その後、高次元数値積分や確率分布の期待値計算を高速化する準モンテカルロ法に研究分野を少しずつ広げ、現在はベイズ統計学の数値計算法の研究に機軸を置いています。

私のことを温かく迎えて下さった数学プログラムの先生方に深く感謝いたします。微力ではありますが、理学部での教育研究に精一杯取り組んでいく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。



物理学プログラム 准教授 大久保 毅

2026年4月より物理学プログラムの准教授として着任いたしました大久保毅（おおくぼ つよし）と申します。私は福岡県嘉穂郡穂波町（現飯塚市）に生まれ、九州大学で学位を取得した後、福岡県を離れ、大阪大学、東京大学と北東に向かう形で所属を変えて、新潟大学に辿り着きました。

私の研究の興味は、たくさんのものが関わることで生じる協力現象全般で、このような研究分野は統計物理学と呼ばれています。大学院生の時には、大きさの異なる球を箱に乱雑に詰めた時の構造や、社会に階級構造ができる仕組みなども研究していました。現在は、磁性体の中にある小さな磁石であるスピンの、同じ方向や反対方向に揃いたがる結果として生み出される秩序構造や、秩序化に伴う相転移の性質を特に専門として研究しています。最近では、研究手段としての数値計算手法の研究にも力を入れていて、テンソルネットワークと呼ばれる、情報を小さな要素

のネットワークとして表現し、効率よく圧縮するアプローチを探求しています。この方法を使って、他の方法では取り扱いえない複雑な磁性体の物性を調べたり、機械学習に必要な資源を減らしたり、量子コンピュータを使った新しいアルゴリズムを考えたりしています。

新潟大学に来てから今日まで、多くの学生さんがとても熱心に物理学に取り組む姿や、興味を持ったことについて熱く議論する様子に、日々、とても刺激を受けています。今後は、研究・教育・運営の全方面で新潟大学に貢献できるように尽力していきますので、どうぞよろしくお願いいたします。



フィールド科学人材育成プログラム 助教

小山 偲歩

2026年4月1日付でフィールド科学人材育成プログラムの助教として着任しました、小山偲歩（こやましほ）と申します。野生動物を対象とした行動生態学を専門としており、特に海鳥の移動生態と生理生態に関する研究を行っています。動物がどのように移動し、環境の変化にตอบสนองしているのかを、行動と生理の両面から明らかにすることを目指しています。

出身は長野県で、岡山大学を卒業後、名古屋大学大学院に進学しました。その後、名城大学でのポスドクを経て、新潟大学に着任しました。大学院生の頃から新潟県粟島に毎年数か月滞在し、オオミズナギドリ調査を続けてきたため、新潟は私にとって以前からなじみ深い土地です。

これまで私は、動物のどのような行動や移動が体に負担を与えるのか、また、海鳥を取り巻く環境が行動や体の状態にどのような影響を与えるのかを調べてきました。主な手法は、動物に小型の

記録機器を取り付けて移動や行動を記録する方法（バイオロギング）と、疲労の程度を示す酸化ストレスなどの生理指標を測定する方法です。こうした手法を組み合わせることで、海鳥がいつ、どこで、どのように行動し、そのとき体にどのような変化が生じているのかを明らかにしようとしています。

新潟には着任前から調査で長く通ってきましたが、実際に生活の拠点となることで、あらためて自然や食の豊かさを感じています。今後は、フィールドでの発見や、学ぶこと、考えることの面白さを学生に伝えながら、研究・教育の両面で新潟大学に貢献してまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。





科学人材育成事業について

新潟ジュニアドクター育成塾の実績を活かして、2024年度から、二つの科学人材育成事業がスタートしました。

中谷財団助成の「自然と人を愛し、共生を実現する未来の科学人材育成プログラム新潟(N-Step新潟)」は、講座や実験活動で学びを深める1年目のチャレンジングステージと、個別課題研究活動を通して探求力を培う2年目のジャンピングステージの、二段階からなる中学生向けの育成プログラムです。2025年度は、二つのプログラムを合わせて40名が受講しました。



STELLA2026

科学技術振興機構(JST)支援の「自然と人の共生に向け知の革新を創る基礎科学人材育成(にいがた“知の革新”STELLAプログラム)」は、地域で卓越した能力と「科学を学びたい」と

いう強い意欲を持った高校生向け育成プログラムです。将来、高校生が理系大学に進学した際に役立つ基本的知識や研究姿勢を養うことを目的に、1年目のエントリコース(223名受講)とマスターコース(41名受講)、2年目のドクターコース(9名受講)の三段階のプログラムから構成されています。ドクターコースのインド・バンガロール研修(12/23~12/28)では、高校生4名がインド理科大学院大学を訪問しました。

両事業では、ポスターセッションを「学びの集大成」として位置づけ、受講生自らが課題を見つけ、解決策を探る力を身に付けることを共通目標に掲げています。中高生の本プログラムでの学びや体験を通して、教育界と地域社会に貢献して参ります。



N-Step2026



教員の受賞・表彰

大井 志穂 准教授(数学プログラム)が、「令和7年度新潟大学優秀論文表彰」を受けました。

新潟大学優秀論文表彰は、本学研究者の研究意欲向上を図り、新潟大学の研究成果の国際発信力を高めるため、国際的に評価の高い学術誌に論文を掲載した研究者を顕彰し研究費を支援するものです。

柴田 翔平 助教(地質科学プログラム)が、「日本火山学会学生論文賞」を受けました。

日本火山学会学生論文賞は、火山学に関する独創的で特に優れた論文を、投稿時点において学生として筆頭執筆した者に与えられる賞で、柴田助教が茨城大学在籍時に発表した論文が受賞対象となりました。

M. Satish-Kumar 教授(地質科学プログラム)が、「日本鉱物科学会論文賞」を受けました。

日本鉱物科学会論文賞は、鉱物科学およびその関連分野における優れた研究論文の筆頭著者に対して与えられる賞です。

周藤 賢治 名誉教授(地質科学プログラム)が、「日本鉱物科学会渡邊萬次郎賞」を受けました。

日本鉱物科学会渡邊萬次郎賞は、鉱物科学及びその関連分野において卓越した研究業績をあげ、長年にわたりこれらの分野の発展に貢献した者に贈られる賞です。

澤田 清 名誉教授(元理学部化学学科教授)が、「瑞宝中綬章」を受けました。

これからの 行事予定

※変更になることが
あります。

10月2日	第2学期授業開始
10月10日	理学部総合型選抜
10月	新潟大学WeeK 地質まつり
	サイエンスミュージアム特別開放ほか(未定)
10月	大学祭
11月21日	理学部学校推薦型選抜
12月27日~1月6日	冬期休業

1月16日~17日	大学入学共通テスト
2月25日~26日	一般選抜(前期日程)
3月11日~31日	春期休業
3月12日	一般選抜(後期日程)
3月23日	卒業式・卒業祝賀会
4月	入学式
4月	第1学期授業開始

お問い合わせ
窓口のご案内

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部学務係

TEL : 025-262-6106
FAX : 025-262-6354
Mail : gakumu@ad.sc.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。